注2 IV. Southwestern を Southern, V. Southeastern を Kentish と呼ぶこともある。またとくに Sus, Berk などの言語特徴が, SW または SE のそれとしばしば一致しないため, これらと区別して Sur, Sus または Brk. Hump を含む Central Southern を考える人もある。

注3 NWMid と SWMid は, NEMid と SEMid ほど明確な対立的特色を示さないため区別されないこともある。

5.2 中英語方言研究

ME の方言研究は主として三つの大きな流れに沿って行なわれて来た。(1) Wyld, Serjeantson, Huchon, Oakden, Moore-Meech-Whitehall などによる, 文学作品, (公)文書を分析材料とし, 特定の音韻と形態素の分布調査を主目的とする研究。この種の研究は1935年に頂点に達する。(2) McIntosh, Samuels などによる形態素(の異綴り字)の方言分布の調査を主目的とする研究で1952年以後 Edinburgh, Leeds を中心に目下続行中。(3) Ekwall, Bohman, Rubin, Zettersten など北欧学者による, 人名・地名または語彙を分析材料とし特定音韻または語彙の方言分布の調査を主目的とする研究。これは特定方言の研究に向けられ, 1913 年以降今日まで続けられている。なお, (2), 最近の(3)の研究は, (1)の研究成果の修正・補完の目的も果しつつある。

5 2.1 ME 方言研究(その一)(Michigan method)

1935年の Moore-Meech-Whitehall による研究に先立つ方言研究のうち注目すべきものは Huchon (1930), Oakden (1930-5)である。いずれも特定音韻(OE /a/+nasals/OE /y/, /ȳ/ /OE /ie/, /īe/ /OE /ǣ/$_1$, /ǣ/$_2$/OE/eo/, /ēo/ /OE /æ/ /OE /f/ /OE ⟨sc⟩, etc.)や特定形態素(she/they/them/be 動詞/-and)を方言の示差的特徴として 30〜45 項目ほど選び, それらの方言分布を, 方言的に決め得る主な文学作品(*PChron*/*Orm*/*Brut*/*AncrR*/*Owl*&*N*/Chaucer/*Gawain*-Poet/*PL*, etc.)について分析調査している。しかしながら, 分析方法およびその結果について高度の科学性を具えた研究は, Moore-Meech-Whitehall によってはじめてなされた。これは(1)の系統の研究の集大成ともいうべきもので, 266

の(公)文書, 43 の文学作品を主材料とし, 11 の主要な示差的特徴の, 1400-1450 年における方言分布を調査している(その結果の多くは 1954 年以降刊行中の *MED* の基盤に組み入れられている)。

5 2 1.1 結 論

ミシガンの Moore-Meech-Whitehall による方言研究の成果はつぎの図9および表で示すとおりであるが, ここでは信頼度の高い特徴(A, B, C, D, E, F, G, H, I)に限定して示した。

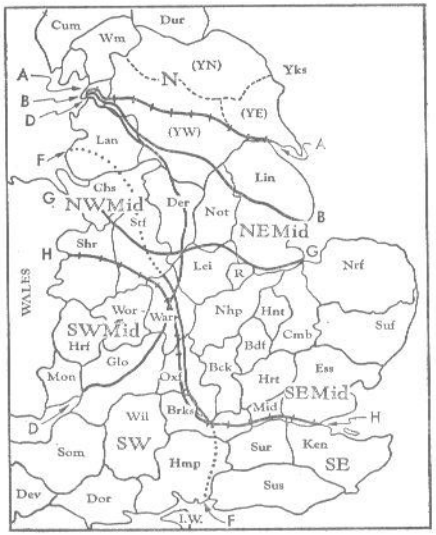

図 9 *MED*, p. 8

Bdf	Bedford	Dur	Durham	Lei	Leicester
Brks	Berkshire	Ess	Essex	Lin	Lincoln
Bck	Buckingham	Glo	Gloucester	Mid	Middlesex
Cmb	Cambridge	Hmp	Hampshire	Mon	Monmouth
Chs	Cheshire	Hrf	Hereford	Nrf	Norfolk
Cum	Cumberland	Hrt	Hertford	Nhp	Northampton
Der	Derby	Hnt	Huntington	Not	Nottingham
Dev	Devon	Ken	Kent	Oxf	Oxford
Dor	Dorset	Lan	Lancashire	R	Rutland

Shr　Shropshire	Sus　Sussex	Yks　Yorkshire
Som　Somerset	War　Warwick	(YN)　〃 North Riding
Stf　Stafford	Wm　Westmorland	(YE)　〃 East Riding
Suf　Suffolk	Wil　Wiltshire	(YW)　〃 West Riding
Sur　Surrey	Wor　Worcester	

特徴	線	N	EMid		WMid	SW	SE
			NEMid	SEMid			
OE/ā/	A	/ɑ:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/
OE/a/＋nasal	D	/a/	/a/	/a/	/ɔ/	/a/	/a/
OE/ȳ/, /y/, /ēo/, /eo/	F	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/y:, y/ /ø:, ø/	/y:, y/ /ø:, ø/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/
/f/-/v/	I	/f/	/f/	/f/	/f, v/	/v/	/v/
/ʃ/-/s/	C	/s/	/s/	/ʃ/	/ʃ/	/ʃ/	/ʃ/
3人称複数代名詞	E	them	them	hem	hem	hem	hem
3人称単数現在	G	-es	-es	-eth	-es, -eth	-eth	-eth
3人称複数現在	B, H	-es	-es, -e(n)	-e(n)	-e(n), -eth	-eth	-eth

注1　J線（OE/ēa/, /ea/, OE/e/（語頭の g, c, sc のあと））の結果については信頼度が低いため除いた。K線（{-and}）については §5211.7 参照。

注2　A, B, C 線は南限を E, G, H, I 線は北限を，D, F 線は東限を，それぞれあらわす。

図 10　*MED*, p. 8

5211.1　A　線

A線は OE /ā/ が ME において円唇化されずに保たれた南限を示す（開音節で /ɑ:/ になったものは除く）。つまり，ME /ɔ:/ は等語線の北にも起こるが，/ɑ:/ はその南には起こらない。この線は，Humber の河口から西へ Yks の YE の南限を進み Aire 川の北側の YW を抜け Lan に入り北へそれて Lune 川へ達する。

5211.2　B, H, G 線

（1）　B線は3人称複数現在の屈折接尾辞 {es} の南限をあらわす。一般に Mids {-en}, {-e}, SW, SE {-eth} に対し，これは N, NEMid の特色をなす。B線は，Lin の中央部，YWを北西に走り，Lan の東側の州境界に達し Lune に到達する。B線は北へ動きつつある。この線は NWMid ではA線としばしば一致するが南では NEMid を二分する。

図 11　*MED*, p. 8

（2）　H線は3人称複数現在の屈折接尾辞 {-eth} の北限を示す。Mids の特徴 {-en}, {-e} が強力でこの北の特徴を押し上げ，南の {-eth} を押し下げている。この線は Thames の河口から西へ Ess, Mid, Bck, Oxf の南側の州境界に沿って進み Cherwell の河口へ達する。ここから北へ Oxf を抜け War, Stf の南と Shr の中央部を抜け Wales に達する。B線は西へ相当入りこんでおり，SE と SEMidを区分する。

（3）　G線は3人称単数現在の屈折接尾辞 {-es} の南限をあらわす。この線は Lin の南側の州境界にそって西へ進み Not, Der の南側を抜け Stf と Chs の西を通って Dee の河口へ達する。したがって西では WMid を二分し，南では C, E 線とともに NEMid と SEMid を区別する。

注　3人称現在単数屈折接尾辞 {-es} については §6611112.1 参照。

5211.3　F　線

F線は OE/y/, /ȳ/, および OE /eo/, /ēo/>ME /ø/, /ø:/ を保つ地域の東限を示す。まず /y/ を示す線は，Oxf, War を抜

図 12　*MED*, p. 10

図 13 Mossé, 1952, p. 24

け北進する。Oxf の南では南下し，Brks へ入り Hmp の東側の州境界へ接近する（この部分が実線でなく点線で示されているのは調査資料からは確定的なことがいえないため。以下同様）。いっぽう，War の北では北西にそれ Stf, Chs の東を抜け，Lan の南西を通る。他の三つの円唇前母音 /y:/, /ø/, /ø:/ の場合も，じゅうぶんな証拠はないが /y/ とほぼ同じ等語線を描くものと推定される。F線はD線とともに EMid と WMid, および EMid, SE と SW をわける。なお，F線については学者の間に意見のくいちがいがある。図12の——線は Moore-Meech-Whitehall, ----線は A. Brandl (*Zur Geographie der altenglischen Dialekte*, 1915), —··—線は H. C. Wyld (1913) をそれぞれあらわす。

注 §4 1 1 1 1 1.2, §4 1 1 1 1 2.2, §4 1 1 1 2 1.2, §4 1 1 1 2 2.3 参照。

図 14 Mossé, 1952, p. 21

5 2 1 1.4 D 線

D線は鼻音の前の OE/a/ が非円唇音 /a/ のまま保たれた地域の東限を示す（mon/nome）。この場合開音節で長母音に変化した母音（nama）を含む。D線は，Lan, Der, Stf の東側の州境界にそって進み War から Glo へ入り西へそれて Severn 川へ達する。したがって北では C, E 線と一致し中央部ではF線と一致し，WMid と他の方言地域を区分する。

5 2 1 1.5 C, E 線

（1） C線は語頭子音 /s/ の南限をあらわす（sal/sulde）。C線は南ではG線と同じく EMid を北と南にわけ，中部で北に転じ Wash あたりで A, B, D 線とほぼ一致する。

（2） E線は3人称複数代名詞 {hem} の北限を示す。15 世紀には {them} が南下し London でも起こるようになる。E線はC線とほぼ同じ線を描く。

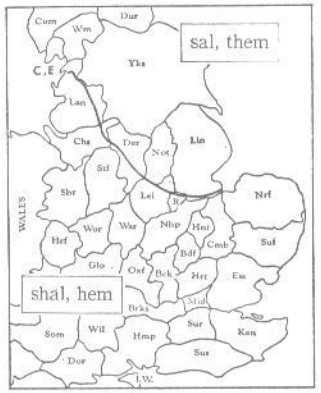

図 15 *MED*, p. 9

5 2 1 1.6 I 線

I線は語頭子音 /v/ の北限を示す。東部ではH線と一致するが，西部ではそれほど北へ入り込まない。

図 16 *MED*, p. 9

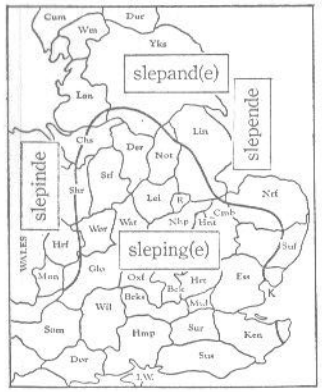

図 17 *MED*, p. 9; Mossé, 1952, p. 78

5 2 1 1.7 K 線

A～J 線ほど明確な方言区分を示さないK線は屈折接尾辞 {-and(e)～ind～end} の方言分布を示す。14 世紀半ばごろでは，この形は，SE の東，Ess, Suf, の東海岸，Nrf, Lin の東および北部，Not の最北部，YW の一部，Lan の大部分，南下して Chs, Shr, Hrf, Mon などに限られている。

5 2 1.2 ま と め

以上 Moore-Meech-Whitehall による研究の結果から，（1）方言境界の重要な等音線（isophone），等形態線（isomorph）の束は Lin の州境界，Ess, Mid の南側の州境界，Oxf と War の中央部，Lan 北部の Lune 川沿いにあらわれる。このように州境界と方言境界線が一致していることは，特定の言語領域を形成することと行政上の境界には密接な関係があることを示す。逆にこのような一致がみられない場合は，地理的境界を越えた，たとえば，交易中心地や文化の中心地などによる隣接言語地域への影響といった要因が働いていた，ということ，（2）等音線，等形態線が州境界と重なり合う場合は自然の障壁と一致するが，そうでない場合は等音線，等形態線はそれとほとんど一致しない。このことは，方言境界が，たとえば居留の歴史，政治組織，文化の中心地の興亡といった人口学的要因を反映している，ということ，などを推定することができる。

5 2 1.3 L～R線

ミシガン方式によって確立された A～K 線に，さらに Oakden (1930-5), Brandl (1915) の研究成果による 7 本の等語線をつけ加えることができる。これらはいずれも 1400 年ごろの方言分布を示す。

（1） L 線（a）gud—god : OE god から出た gud /gy:d/ は Lan と Yrk を結ぶ線の南側には起こらない。（b）-li— -lich : ME では派生接尾辞 {-lich} は（a）と同じ分布を示す。（c）quilke—whiche:〈qu-〉[xw-] は Lan と Yrk を結ぶ線の北側にのみ起こる。

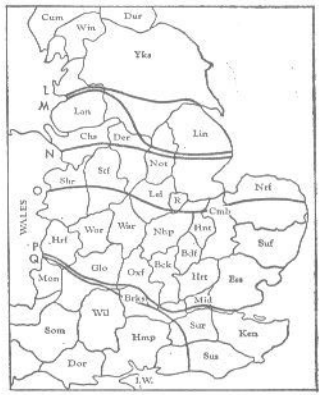

図 18 *MED*, p. 11; Oakden, 1930-5, p. 38 ff.

（2） M線 hand—hond : OE /a/ は /nd/ の前で ME /a/, /ɑ:/, および /ɔ/, /ɔ:/ となった（cf. D 線）。前者の非円唇母音は Der 北部，Not, Lin より北で起こり後者は南で起こる。

（3） N線 snau—snou : OE/ā/ +/w/(/x/, /ɣ/) は ME で /au/, /ɔu/ となったが，後者は Chs, Der の中央部，Lin より北では起こらない。

（4） O線（a）-es—-est : 2人称単数現在の屈折接尾辞 {-es} は Salop (Shr)-Wash (Nrf) を結ぶ線の南には起こらない。（b）broken—ibroke: OE ge- から出た過去分詞の接頭辞 ME i-, y- は（a）と同じ線の北側では起こらない。

（5） P線 thei—hi, heo: 3 人称複数代名詞(主格)の {thei} は EMid, London, Glo の北部，Hrf 南部より北側で起こる。

（6） Q線 wul(le)—wel(le):OE /ea/, /ēa/ から出た ME /ɛ/ は N. Mids, SE の大部分で，いっぽう /y/ は主として SW, SE の一部で起こる。

（7） R 線 （a）R_1 線 strete /stré:tə/—strete/stré:tə/:OE の状況を反映し，ME/e:/ は SE(K), NMids, N で起こる（§4 1 1 1 2 2.1（2）（a），§4 1 1 1 2 2.2（1）（a）参照）。（b）R_2 線 -stret/-stret/—-strat/-strat/ : OE /æ/$_1$ はとくに複合語（地名）では短母音化し，Lin, Nhp, War の南側州境界にそって

図 19 *MED*, p. 10; Oakden, 1930-5, pp. 23-4

Wor 中央部を結ぶ線より北では -stret，南では -strat として起こる。

5 2 1.4 各方言の2次的特徴

各方言は，以上述べた示差的特徴のほかに，じゅうぶんな資料が欠けているとか EME にのみ起こるなどの理由で等音線，等形態線としてあらわしがたい特徴をいくつかもっている。これらは ME 方言研究の2次的資料として役立つ。

5 2 1 4.1 SW

当然のことだがこの方言は OE の WS の特色をいくつか残している。（1）OE WS/ea/(<æ/) は /ld/ の前で長母音化し /ēa/ となり ME の SW で /ɛ:/ となる（eld<OE WS ēald cf. Mids old <OE Merc āld)。（2）OE WS /e/+/x/ は EME SW /ɛɪ/ となる（feight<OE WS feht cf. Mids faught<OE Merc fæht)（§ 4 1 1 1 3.4（2）参照)。この特色は SE(K) のそれでもある。（3）語末の /ə/ は SE 同様，15世紀はじめまで保たれた。（4）名詞の屈折（単数属格，単・複数与格，複数主(対)格)，形容詞の屈折（強屈折の属・与・対格)，定決定詞の屈折（属・与・対格）はいずれも 13 世紀の前半ではかなり規則的に保たれている。（5）ha, a (=he, she, they, them), hare (=her, their), ham (=them) など機能負担荷の高い代名詞がしばしば用いられる。（6）弱屈折動詞 (erien (=plow)/lufien (=love)) は 13 世紀中，語幹連結的（thematic）-i- を保つ。

5 2 1 4.2 SE

（1） OE K /e/（<æ）は ME の SE でも引き継がれる（gled<OE K gled cf. Mids glad<OE glæd)。これは SWMid の特徴でもある。（2）OE K /ē/（<OE/ǣ/₂）は ME の SE でも引き継がれる（deel<OE K dēl cf. Mids deel/dɛ:l/<OE dǣl)（§ 4 1 1 1 2 2.1 (2)（b）参照))。（3）OE /ȳ/, /y/ は ME の SE でそれぞれ /e:/, /ɛ/ となる（gelt/ver)（§ 4 1 1 1 2 2.1 (3), § 4 1 1 1 1 1.2 参照)。（4）OE K /ēa/ は他の地域では /æ:/ >/ɛ:/ となったのに対し，SE，とくに K では [jé:]（[ɪé:]），のち /ɛ:/（stream, strem<OE K strēam)，または [ja]，のち /ɑ:/ となる（great, griat, grat<OE K grēat)。（5）（a）OE K/īo/ は SE，とくにKではまず [í:ɛ] となり，つづいて [ɪé:]，のちに /e:/（diere, dyere<OE K dīore)，または [í:ə]，のちに /i:/ となる（bie, bi, by <OE K bīon)。（b）OE K/ēo/ は LOE で /īo/ と併合したから（a）と同じ発達をする。他の方言では /e:/ となる（diep, dyep<OE K dīop cf. Mids deep<OE dēop)。（6）頭子音結合 /hl-/ は SE では14世紀まで保たれる（§ 4 1 4 2.1 参照)。（7）名詞，形容詞，冠詞，人称代名詞の歴史的な形態は SE，とくにKでもっともおそくまで保たれた。

注1 OE K /ēa/ の ME の音価については定説がない。ひとつの考え方によれば，11～12 世紀では〈ie～ye～ia〉，つづいて〈ya～yea～ea〉，14 世紀から〈e〉であらわされるが，このうち〈ie～ye～yea〉は LOE [é:æ]>[í:æ]>[ɪǽ:]>[ɪé:] または [jé:] のようにもとの第1要素が高く狭められて第2要素に強勢が移り上昇二重母音を生じた。この二重母音はとくに歯音の後位置の語頭，語中で長く保たれ，その他ではのちに /ɛ:/ となる（〈ea～e〉)。いっぽう〈ia～ya〉は〈iea～yea〉の短縮音 [ja] か伝統的な [ɪæ] をあらわす。その他，OE K/ēa/ は [éá] という平坦強勢をもつ音に変化し，上昇二重母音と下降二重母音にわかれ，前者から [ja] のち [ɑ:]，後者から [ɛə]，のち [ɛ:] が発達した，とする考えもある。さらに OE K/ēa/ は [æ:] か [ɛ:] のいずれかの音をあらわすという意見もある。

注2 OE K /īo/ についても意見がわかれている。一つの考えによると，EME で [í:ɛ] となり [í:ə]>[i:] /i:/ となったものと，いっぽう上昇二重母音になって [ɪé:]（〈ie～ye〉）となったものに分離する。後者は語中とくに歯音のあとで長く保たれ，その他では次第に /e:/ となった。ほかの意見としては，OE 音はまず平坦強勢をもつ [íé] に変化し，上昇二重母音として [jɛ] または [e:]，下降二重母音として [ɪə] または [i:] となったとする。さらに，OE K /īo/ はすべて [e:] となったとする考えもある。

5 2 1 4.3 E & WMids

（1） OE/æ/ は Mids では /a/ となる（glad<OE glæd)。（2） とくに NWMid では /ng/ の前の /ɔ/ は /u/ に変化する。この変化は Nrf, Suf でもときとして起こる（long(<OE lang) : tongue (<OE tunge))。（3）WMid では語末音節の /b, d, g/ は舌音，鼻音のあとで /p, t, k/ に変化する（ʒonke/þynke(=thing))。（4）語末の〈e〉/ə/ は14世紀末までに消えた。（5）名詞，形容詞，冠詞などの屈折は，すでに 12 世紀末前に一部を除き消失した。（6）（a）3人称の代名詞の対格形は 12 世紀末前に与格形により置換される。（b）ho (=she) は WMid でしばしば起こる。（7）（a）be 動詞の複数現在形として are(n)/been/be などが起こるが NMids ではとくに are(n) が好まれる（§ 6 6.2参照)。（b）

弱屈折動詞の語幹連結母音 -i- は大部分 12 世紀末前に消失した。

5 2 1 4.4 N

（1） OE/ā/＋/w/（/x/, /ɣ/）は MEのNでは /au/ となる（knawe(n) <OE cnāwan cf. Mids knowe(n)）（§4 1 1 1 3.7 注1, 注4 参照）。（2）14 世紀半ばごろから N では /aɪ/>/ɑ:/ の変化がみられる（avale cf. Mids availe(n)）（§4 1 1 1 2 3.1 (2) 参照）。（3）14世紀にはNでは /o:/>/y:/ の変化が起こる（stod, stud, stuid cf. Mids stod）（§4 1 1 1 2 1.2（2）参照）。（4）ON 起源の軟口蓋・閉鎖音 /k, g/ を保つ（kirk(e)/geve(n)）（§4 1 3 1 1.1 注1, §4 1 3 4 1.1 参照）。（4）語末の〈e〉/ə/ は 13 世紀末までに消失した。（5）名詞，形容詞，冠詞などの屈折形はもっとも早く消失し，代名詞，動詞の屈折組織も Mids よりも早く統一化された。（6）（a）be 動詞の複数現在形は are(n)，（b）命令法の複数屈折接尾辞は {-es}，（c）1 人称単数現在，複数現在の屈折接尾辞は，主語が動詞と隣接する代名詞の場合（この場合は -e かゼロ）を除き {-es}（I(we) that findes—I (we) finde)）（§6 6 1 1 1 1 2.1 (3) (a) 参照）。（d）不定詞の指標辞は to のほか at も起こる（at sing(e)）。

5 2.2 ME 方言研究（その二）（Edinburgh method）

5 2 2.1 資料および研究法

第二の流れの ME 方言の研究は，1952 年以来 McIntosh, Samuels を中心に進められて来，1956年以後その方法論や一部の成果が公表された。そしておそらく現在（1971年）までにその作業の大部分を完了していると思われる。この研究成果の全貌はまだ明らかにされていないが従来の方言研究の結果を大はばに修正することになるはずで，出所が明らかでないものも含む文学作品の写本 530，（公）文書類 1061 を分析材料とし，扱われる形態素の数 100 万以上，方言分布を示す方言地図 100 枚以上の規模で行なわれることになる。その特色を一言でいえば通時的機能主義（diachronic functionalism），すなわち言語変化を通時的観点から機能的，組織的にとらえる，ということにある。じっさいには写本などにあらわれる異形態を方言地図にしるし，等綴り線（isograph）を描き，それらの音韻あるいは書記素的（graphemic）分析よりも異綴り字的（allographic）分析を主目的とする。これらの研究目的，方法論は，ミシガン方式の批判のことばの中に明瞭にあらわれている。（1）示差的特徴の項目がミシガン方式ではわずか 11，Oakden でも 45 にすぎない。これでは ME 方言の全貌をとらえるにはきわめて貧弱である。エディンバラ方式では 260 項目以上にのぼる。（2）選ばれた示差的特徴が均質でない。たとえば OE /y/, /ȳ/ に由来する語をすべていっしょに扱っているが，/y/ あるいは /ȳ/ に由来する各語群だけでも ME における行動が異なっている。したがって各形態素を一つ一つ調査しなければならない。（3）同様に 3 人称複数代名詞は〈h〉—〈th〉という対立のみで処理しているが，じっさいにはさらに下位のセットへの配慮が必要で，たとえば {hom} はそれ自体で特定地域を構成する。形態的には hem/hom/heom/ham/þem/þam/þaim/þeim/them/tham/thaim/theim の 12 項目が必要である。（4）従来の方法は，書記素は話しことばの組織に属するある形態の書直しにすぎないとする言語観に基づいているが，ME の方言研究にあっては書かれた材料は書記素の形で扱われなければならない。たとえば，〈bane〉:〈bone〉がNとその他の方言で対立するならば，それは音価に関係なく書記素間の対立として取り扱われるべきである。（5）ミシガン方式ではしばしば 13 世紀（ときには12世紀）の材料と，14，15世紀のそれとを区別せず併置して用いている。そのため年代差による時間的変化と純粋に方言に属する空間的変化とが混同されている。ME の文献は 1400 年以前はきわめて少なく，またいっぽう 1450（1460）年以後は非常に標準化されてしまうので分析材料としては，1350～1450 年から選ぶのが ME 方言研究に適した時間のわたりということになる。（6）Moore たちが扱った分析材料はきわめて限られている。たとえば，文学作品の写本は由来地の明瞭なもののみで，しかもわずか43にすぎない。これはエディンバラ方式が対象とするものの 1 割以下でしかない。由来地の不明な写本でも「適合（fit）」の手法を用いれば，その出所を逆算することができるので分析材料に加える必要がある。一般的には，由来地の明瞭な写本に起こる形態素（の異綴り字）をできるだけ多く方言地図にしるし一定の方言分布を得る。つぎに仮説上その由来地から出たと考えられている出所不明の写本の特色を地図にしるし，それらが前者の結果と適合するかどうかを調査する。たとえば，*GGK* の写本 Cotton Nero A x, Art. 3 の由来の候補地である S Lan, Chs, SW Yrk, W Der,